

# 中世の山陽道 ～貴族から武士の時代へ・政権奪取の道～



鎌倉時代になると政治の中心が鎌倉に移り、鎌倉を中心とした交通網の整備が行われました。「筑紫大道」は、元寇に備えて京都と博多を結ぶ軍用道路として作られたとされる道の名で、当時の山陽道のことを指します。

室町時代から戦国時代にかけては強大な政権が現れず、全国的な宿駅制度が特に定められませんでした。そのため、中世の山陽道のルートを確認することはできませんが、『太平記』には御著宿(姫路市御国野町御着)についての記述があり、『鶴御庄当時日記』には国府、今宿(姫路市今宿)についての記述があることから、姫路における中世山陽道のルートは古代山陽道と大きくは変わらなかったと考えられます。

また、中世は武家が公家の支配を退け、各地で内戦が勃発、権力を争った戦乱の時代でした。資料は乏しいものの、山陽道は室町幕府の成立や羽柴(豊臣)秀吉の天下統一などに重要な役割を果たしたと考えられます。

## 筑紫大道の面影を探して

中世の山陽道のルートの中で、現在も明確に位置を示すことができる部分があります。嘉暦4年(1329年)の「播磨国鶴荘絵図」とこれを写した旨の裏書を持つもう一つの鶴荘絵図をもとにした、法隆寺の荘園・鶴荘内を通過する部分です。古代の山陽道は大市(姫路市太市)からまっすぐ西進して槻坂を越えると考えられますが、中世の山陽道は大市から馬山(太子町)の西麓を南下して鶴荘絵図に描かれた道の東端に達したものと考えられます。これにより、姫路市内では同一ルートであった古代の山陽道と中世の山陽道は、大市から西では異なるルートをたどっていたことが分かります。近年の道路整備に伴う発掘で、このルート沿いの2カ所で遺構が発見されています。筑紫大道跡(太子町佐用岡字堂ノ後)で発見された遺構は8mほどの道幅で、縁には礫が敷き詰められていました。福田片岡遺跡(たつの市菅田町福田字片岡)内の遺構でも7～10mと推定される道と、南側に最大幅60cm、深さ10cmの側溝が見つっています。中世の山陽道はルートを変えつつ、地域交通の主要路として近世以降に引き継がれていったようです。



福田片岡遺跡(たつの市)

## STORY

### 室町幕府成立の道～赤松円心拳兵

元弘3年(1333年)、播磨の有力武士である赤松円心は、後醍醐天皇の皇子・護良親王の令旨に応じて若鞆城(上郡町)で拳兵しました。船坂山、高田(上郡町)で幕府方の軍勢を破りながら山陽道を東進し、幕府方から寝返った足利尊氏とともに京都・六波羅探題を攻め落とします。

その後、建武政権に反旗を翻した尊氏に属し、九州で尊氏が兵を集めている間、新田義貞率いる討伐軍を白旗城(上郡町)で防ぎます。尊氏軍と合流した後は、湊川の合戦で新田・楠勢を破り、室町幕府の成立を助けてました。これらの移動には海路も使われましたが、山陽道を利用して各地の戦いが繰り広げられたと考えられています。



赤松円心坐像(宝林寺蔵)

### 戦国時代へ～嘉吉の乱

室町幕府6代将軍である足利義教は、将軍家の権威を高めるため厳しい態度で公家や大名に臨み、強大化する守護大名の力を削ぐと家督相続に介入しました。その暴君振りに反旗を翻したのが赤松満祐。嘉吉元年(1441年)、嫡男・教康が義教を暗殺し、赤松一族は本拠地である播磨に引き上げ、書写坂本城に立てこもります。和坂(明石市)で激戦を繰り広げますが、山名の軍勢が生野から押し寄せると城山城(たつの市)に籠城。その後一族69人とともに自害したといわれます。この嘉吉の乱により将軍家の権威は失墜し、応仁の乱、明応の政変を経て、戦国時代へと突入していきました。

### 秀吉天下統一へ～中国大返し

天正10年(1582年)、播磨を平定した羽柴(豊臣)秀吉が備中・高松城(岡山県)で水攻めをしていた最中、本能寺の変が起こりました。このとき、軍師として秀吉に従っていた黒田官兵衛は「ご自身で天下をとる好機です」と進言し、早々に毛利と和議を結んで撤退を開始します。秀吉は備中高松から明智光秀が陣取る京都までおよそ200kmの行程を7日で走破しましたが、その途中で姫路城、明石に立ち寄り、山陽道を経由するルートを通ったと考えられます。秀吉はこの戦いにより天下統一への足掛かりをつかみました。



「皇国二十四功 羽柴筑前守秀吉」  
国立国会図書館デジタル化資料より